



続く、地下の美術館へ

全長約110kmに及ぶストックホルムの地下鉄は、時に“世界一長い美術館”とも称されることを存じだろうか。実は、100駅のうち94もの駅でさまざまなアーティストの個性的な芸術作品に触れることができる。各駅の歴史やその街の様子とともに、地下鉄アートを紹介する。

ブルーを基調とした中央駅T-Centralen(ティーセントラーレン)は、バターン化したつる性の植物をモチーフにしたデザイン。

Metroart



AGORA
Special
vol.358

大迫美樹=文
Text by Miki Osako
机 宏典=撮影
Photo by Hironori Tsukue



1 アーティストのウルリック氏とアルネ・フレデリクソン氏が手掛けた天井絵。細胞などをモチーフにしたデザインが特徴的。
2 壁に飾られた半身像のレプリカ。
3 ほとんどが本物という貴重なマカラス宮殿の装飾品やその断片など。
4 ホームは歴史的な像や装飾品で埋め尽くされ、厳かな雰囲気。



Kungsträdgården ケングストレードゴーデン駅 マカラス宮殿の世界へと誘う王立公園駅



駅の入り口には、「Riddarhuset」の屋根にある戦士の像を再現したものが飾られている。

歴史と伝統をもつスウェーデン。この国では一九三七年以降、公共建築物の建設費用の一部を必ずパブリックアートに割くことが決まりており、現在もストックホルムでは2%の費用が芸術に使用されている。街中を散策すると、さまざまな公共の場で芸術作品を目にすることができる。電車を待つわずかな時間に足を止め、アートの前で写真を撮り合う若者たちぐら

で、中で目に留まる地下鉄の駅の目印、「T」の看板。そこへ吸い込まれるように地下へと流れしていく人々。ストックホルムでの暮らしを支える重要な交通手段である地下鉄は、日々、足早に走り去る乗客で溢れている。

そんななか、こんな場面に遭遇することがある。電車を待つわずかな時間に足を止め、アートの前で写真を撮り合う若者たちぐら

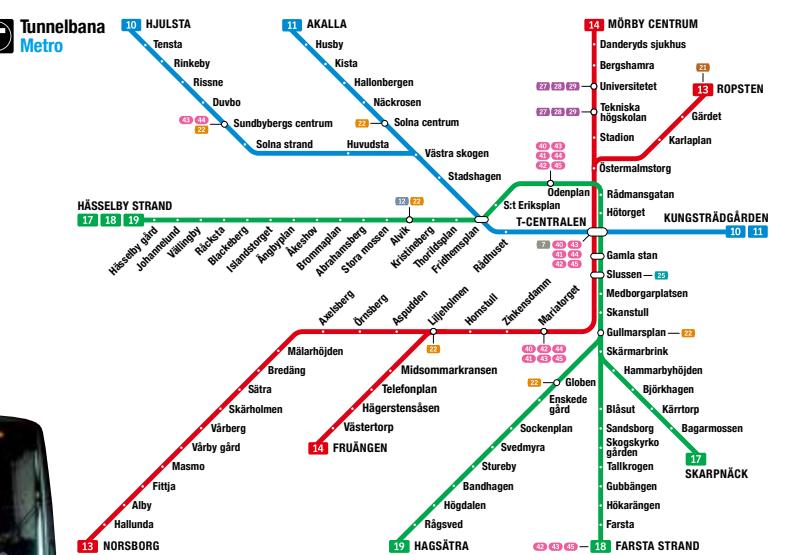
で、中で目に留まる地下鉄の駅の目印、「T」の看板。そこへ吸い込まれるように地下へと流れていく人々。ストックホルムでの暮らしを支える重要な交通手段である地下鉄は、日々、足早に走り去る乗客で溢れている。

な

行われ、ブルーラインの駅も完成した。それらの駅は、削った岩盤壁を当時の新技術の吹き付けコンクリートで覆うことで洞窟のような雰囲気を作り出したため、洞窟駅と呼ばれた。



- 5 シンプルで北欧らしい鉄道会社SLのロゴは1977年にデザインされた。
6 地下鉄入り口に立つ看板のTのシンボルは、地下鉄を意味するTunnelbana(トゥンネルバーナ)の頭文字から。
7 昨年から白を基調とした新しい車両が登場。2023年までに96の車両が新しくなる予定。



© AB Storstockholms Lokaltrafik Version 2018.06.27



お花見や日光浴など市民の憩いの場、王立公園。冬にはアイススケートリンクが登場する。

がる。ここはストックホルムの最古の公共公園の一つだ。春には日本から贈られた八重桜が咲き誇り、大勢の人の目を楽しませている。また王立公園前にある水辺の対岸には王宮を望み、中世の街並みが残る旧市街地が広がる。駅を訪れた際には、駅のアートに想いを馳せながら王立公園でのんびり過ごしてみてはいかがだろうか。そこから王宮に足を延ばし、旧市街地を散策するのもまたいいだろう。

- ①公園前の対岸には観光で人気の王宮が。王族の居室の見学が可能で、王室の歴史を展示する博物館などもある。
- ②王宮周辺には、たくさんの衛兵が駐在し警護している。
- ③王立公園から徒歩の距離にある小さな島、シェップスホルメン島には近代美術館がある。島へ渡る橋には王冠の装飾があり、そこから王宮を望むこともできる。



に公園の敷地内に建てられていたマカロス宮殿の歴史を基に駅をデザインしたという。

駅に一歩足を踏み入れると、た

くさんの彫像や宮殿の装飾品が随所に飾られ、まるで美術館のような空間が広がっている。

駅構内の赤、白、緑のカラーは、バロック様式庭園の特徴である赤い砂利道、白い大理石の彫刻、パルテール（整形花壇）に由来したもので、かつて地上にあったというバルロック様式の美しい庭園を彷彿とさせる。

壁にかかる男女の半身像やマスカロンは、マカロス宮殿に飾られていたものを再現。一六四三年に完成したマカロス宮殿は、その時代ではほかに比類のない豪華さで市民を魅了したと伝えられている。駅の出入口に続く通路の下には宮殿の装飾品が置かれ、大部分はかつて宮殿で飾っていた本物だといふから驚きだ。

当時、市民はマカロス宮殿の外観や美しい装飾を眺め、その享受にふけっていたといった。ウルリック氏は、駅という気軽に訪れることができる場所に、マカロス宮殿の装飾品を飾ることで、当時のように入々を喜ばせたかったのかもしれない。

駅から地上に上ると、市民の憩いの場である王立公園へとつな